

Monthly Report 月間報告 2002年7月～12月

2002年7月

今回ウガンダでのスタディーツアー受け入れという事で、エチオピアの免許を国際免許に書き換えるという作業がありました。日本なら必要書類をもってお金を払えば1時間と掛らない作業。ちょうど就労ビザ、滞在ビザ取得なども重なって、とても手間の掛る手続で、ふと読んだひとつの本の題名と重なりました。それは、「The Man with the key has gone!」ウガンダで医療宣教師として働かされているアイルランド人の実話を元にした本です。肝心な時になって必要な部屋の鍵を持った人がどこかへ行ってしまっていると言う事は、エチオピアでもよくあることです。しかも、それが勤務時間内であってもです。意味のない印鑑、高額な手数料、膨大な提出書類、役人の勤労意欲の低さ。世界に誇るエチオピアの官僚制の一端を紹介します。

さて、運転免許センターにまず出向くものの、入り口には人の行列。待っていては埒があかないので、強引に中に入って国際免許証取得の窓口を尋ねるものの、行くところ行くところで「あ、それは隣の部屋」とたらいまわし。結局1時間して分かった事は連邦レベルの運転免許発行センターに行かなければならないとの事。連邦の建物に向かい、汚い犬が数十匹はたむろしている入り口を中に入るものの、電気がないのか薄暗くて牢獄のような建物。国際免許担当者を探して尋ねるものの、「いま席を外しています」。待てども来ないその担当者。とにかく必要書類だけでも他の人に尋ねたら、免許証その他数種類の書類コピーと共に、昨年日本の免許証をエチオピアのものに書き換えた時に払った、たった100円ほどの領収書のコピーも必要と。誰がそんな領収書を控えているのか？でも、必要なものは必要と言い張る役人。免許書き換えまであと2ヶ月だったため、そのまま書きかえれば領収書もでるとみて、すぐに最初に行った免許センターへ。時間は午後3時半。普通ならまだ働いている時間なのに、「担当者は帰りました」。「どうして？」という質問が全く意味をなさない、空しい瞬間です。代わりに「明日は朝からその人来ているね」「はい」「本当だね」「はい」という会話でなんとか明日への希望へ繋げるのがやっと。でも、その希望もあつてないようなもの。

翌日の免許書き換えは、担当の部屋の前で列を作らず、無秩序に群がる人々を除けば、すんなりと済み、いざ連邦の免許センターへ。ようやく担当官に直面。まず、関連書類を出して200円ほどの支払い。支払いは2階。世界の交通ルールを説明する表冊子ももらい、領収書をもって元の間へ。今度は担当官の印鑑が押された書類を持って、最終責任者のいる6階へ。エレベーター無し。標高の高いアジスアベバでの階段登りは息がきれません。ハーハーいいな

がら、責任者の部屋に入るものの、また「まだ出勤していません。ひよっとしたら 1 階に」と言われ、戻るもののやはりおらず、再び 6 階へ。もうお昼も近い時間なのに、まだ来ていないとは。とにかく待ちつづけたら、ようやく現れ、書類をパッと見て簡単に印鑑を押され、さあ終わったと思ったら「明日の朝から講習がありますから」と。もちろん、国外での運転だから色々な交通規則の違いがあるにしても、標識などは基本的に世界共通。でも、受講が条件という事で、仕方なしに翌日の講習場所を聞き出します。

続きは来月に……。

2002 年 8 月

前回からの続き……

翌日、トラック運転免許試験も行えるような大きなトレーニングセンターへ。しかし、これもどこが受付なのかさっぱり分からない。「たぶんここでしょ」といきすぎる人から聞いた場所の前にたたずむこと 1 時間。すこし離れた所で人だかりができていたので、ひよっとしてあそこかと思っていったら、案の定そこが受け付け。親切な案内係がいつもいる日本の役所や銀行をふと懐かしく思い出します。すぐに講習が始まるということで、教室に入ったら外国人は私だけ。当然英語ではなく、現地のアムハラ語。アムハラ語は会話程度しか理解できない私を見かねて、授業を中断して先生が別の担当官の事務所へ。「英語での授業は午後から」と。しかし、午後の講習まであと 4 時間ほどもあることから、なんとかならないかと詰め寄ったら「最高責任者のところへ」と、またたらいまわし。幸いこの責任者は機嫌がよく、「じゃあ特別にあなたのために個人授業をさせましょう」と、来た先生が英語でしっかり授業をしてくれると思ったら、私が簡単なアムハラ語を話せるのをいい事に、結局はすべてアムハラ語での説明。標識の説明も「これはなんでしたっけ？」と尋ねても「うーん、何でしょうね？」。これで国を代表する免許センターの先生か？質問攻めしていじめていても仕方がないので、とにかく早く授業を終わらせるように急かしたら、2 時間の授業がたったの 20 分で終了。「講習受講」の印鑑などを押しもらって、再び連邦の事務所へ。

時間はまだ朝 11 時前。なんとか書類提出だけでもと思って出向くものの、やはり「担当者は席を外しております」。「入り口のドアに午前中は 12 時半までって書いてあるじゃないですか？」と言っても、いない人はいない。午後に出向くも、あの 6 階にいるはずの責任者はまた「席を外しております」。その間に、必要な費用の支払いを 2 階へ。そして、また 6 階。ここまできると、高地での階段登りも慣れてきます。すこしたってようやく現れた責任者が、新しい免許

らしいものに写真を張り、判子を押して「やっと」と思ったら、「外務省へ行って印鑑を押してもらってください。」免許センターでこれだけの手間が掛ったのなら、外務省ならもっと…、と一瞬ぞっとしました。何でこんな簡単なことをひとつの役所が一括してできないんだろうか？完全な縦割り社会、官僚制度のなせる業です。

大きな門構えの外務省へ。「すぐ裏手の建物で印鑑を押してくれますよ、すぐそこ」という門番の言葉を信じ、車を走らせるもののそれらしい建物、標識が見当たらない。「すぐそこ」がエチオピアでは「すぐそこ」ではないことを分かっている、肝心の時に私は引っかかかってしまいます。ようやく 30 分経って見つけた場所に駆込むも、「午後に来てください」。時間はまだ 11 時半。聞き出した午後の勤務開始時間直前に来て、とにかく外務省の印鑑を押してその日中にすべてを終わらせる事ができることを願いつつ。しかし、「それじゃ、明日の朝 10 時に来てください。」たったひとつの印鑑を押すのに、1 日も掛るとは。とにかく、明日の昼にはウガンダへいくからそれはできないことで詰め寄ると、なんとか午後 5 時半にはできると。「どうせ印鑑をもった担当者が外でぶらぶら遊んでいるんじゃないか」と言いたい気持ちをぐっと抑えて最後の望みに掛けます。その間にエチオピアの出入国ビザ所得の手続。この国は観光ビザによる旅行者以外、エチオピア人も含めて国外へ出る時のビザが必要な不思議な国。エチオピアを出国する毎に幾らかお金を払わされるのだから、結構な税収入があるはずなのに、なぜこの国は…、とブツブツ心の中でぼやきながら再び外務省へ。さあ、国際免許証所得のクライマックス。「今度は、…の事務所へ行って印鑑を…」と言い出されない事を祈りつつ、震える声で尋ねると、「はい、これ。できていますよ。」発行日などに間違いがないかをその場で確認して、めでたく国際免許証所得！2005 年まで有効なので、後 3 年はこの苦勞をしなくても良いんだと少し安心。

終わってみればそれなりの思い出として残るものの、時間のない当時の自分にとってはまさに戦いです。でも、エチオピアの官僚制の餌食になったらそれまで。もがけばもがく程落ちていくアリ地獄のよう。ある程度は柔軟性を持ち、ここは日本ではない事をしっかり認識しておかないと、前に進めないことを改めて教えられます。

2002 年 9 月

3 年前の秋。乾ききった大地に群がる家畜。穀物の収穫に忙しい農民たち。破れた服をまとった子供。外国人の訪問客に「今年も収穫はいいんだが、毎年生産量は下がるし、うちの家族全員を食べさせるのがやっと…」と苦渋に満ちた表情で彼らの貧困や諸問題を訴える。短

期間の視察でエチオピアはメタロビのプロジェクトを訪問したときの私の印象は、途上国と呼ばれる国の農村地帯の典型としか写らず、ただ冷たい風が吹き付ける中、靴をはかずとも丈夫で分厚い裸足を持つ農民の姿が脳裏に焼き付いているだけでした。

そして、3年後の今年。協力団体の代表を招いてのプロジェクト評価が実施され、メタロビにおける人々の成長を垣間見ることが出来ました。ある住民組織のリーダーは「組織で捻出したお金をもとに、地域で一番貧しい家庭の子供をサポートして学校に行かせます。」と、組織の利潤確保を超えて更に貧しい隣人に仕えていく姿を見せました。倉庫兼事務所、雑貨屋、共同農場、井戸、地域住民向けの識字教育、そして貧しい里子のスポンサーと様々な活動を通して、「諸問題の列挙」で終わっていた農民が、「自分たちに出来ること」そして「他者に対してできること」を主張し始めたことに、私も大きな感動を覚えました。一見すれば、人々も汚れた服に裸足、表土流出が悪化しているところも依然ありますが、人々の心の中における変化はゆっくりであるものの、確実に起きています。変化が可能であることに私達自身が励まされます。

一方、「まだまだあなた達のサポートは不十分ですし、私達は未熟です。来年の撤退をもうすこし延期したらどうでしょう」というグループリーダーもいました。未熟という表現は、活動を通して学びつつある私達支援団体にも適用できます。地域の自立を考えると「完熟」はありえません。つまりは、活動に関わるすべての人が成長しつつある存在なのです。しかし、自らの成長、変化へのチャレンジを止めたときに、希望が失われます。その結果が上のリーダーの言葉に表れています。多少なりとも人々に依存心を植え付けてしまった私達外部者の、アプローチにも問題がなかったのか反省を迫られます。

今回の評価を通して、「プロジェクト対象者・受益者」とされるコミュニティーの人々も、そして「プロジェクト実施機関」もしくは支援団体である私達も、共に「気づき」の過程にあるということを教えられました。支援者への説明義務を果たすために、プロジェクトの評価手法がこの業界で色々と議論されている中で私達が立ち返る所は、評価をする側もされる側も評価を通じて学ぶ、気づかされるという視点です。

自分の必要を越えて他に仕えていく「ひとづくり」が私達の団体としてのビジョンであり、そのビジョンに照らし合わせて指標を設定、そして進行中の活動を評価します。しかし、この指標はあくまでも「道具」に過ぎず、これにこだわり過ぎると人々の変化、成長をその道具の中だけで捉えてしまいます。例えば、地域リーダーがどれだけ村の問題解決に貢献しているか、数量的にその達成度を計ったとしても、出来た出来ないの結果だけにとらわれていては、そこに生きる人々の「気づき」の大切さから離れていってしまいます。目指すゴールを正しく設定すること、そしてそれを元に進捗状況を把握、評価することは欠かせません。しかし、なにより

も重要なのは、日々成長する私達ひとりひとりの「意識化」のプロセスです。プロジェクトはこれまで、必要なトレーニングや活動を地域住民と共に実施しました。しかし、出る言葉すべてが問題のリストアップだった人が、問題を乗り越え更に将来への夢を語れるようになるまでには、目に見える活動だけでは不十分。その人の中に着実な「気づき」があったからに他なりません。ビジョンと現実の中で、また大切なことを学ぶことが出来ました。

2002年10月

悲しげな目、うつむいた大きな顔、痩せこけて汚い体、荷物の運び過ぎか切り傷からの出血で汚れた背中。車の警笛が何を意味するのかわからないといった表情で、多くの車が行き交う幹線道路の真中に立ち尽くす。どの角度から見ても「マヌケ」「悲惨」「抑圧」といったイメージ。エチオピアにいて、外に出た時に必ず一度は見るのが、このロバ。日本人は穏やかで優しい顔つきをしたロバに、かなりの好印象を持っています。日本から来たお客さんの多くが、車窓からロバの大群を見つければ珍しがりますし、まるでアイドル歌手を追いかけるかのように、カメラを真剣に向ける人までいます。

しかし、エチオピアでは酷使された労働者。数メートルもの高さに積まれたワラ、重い砂や砂利、セメント袋、水のタンク、薪の束を急斜面が多いメタロビの現場でもスイスイ上り下りしていきます。首都にあっても、タクシーに負けない便利で安価な交通手段。馬ほどの背丈がないので、荷物も積降しやすい。牛よりは小柄で足が速い。草食で餌にお金が掛からない。でも、持ち主からはこき使われ、蹴られ、殴られ、それでいて十分な餌を与えられず汚いごみ捨て場を漁っているのが良く見られる光景です。日本では愚かなことを「馬鹿」と言いますが、エチオピアでは「ロバ」という言葉が同義か、それ以上にイメージの悪い言葉として用いられます。ロバを愛しい目で見つめる日本人の心を、エチオピア人は理解できません。

それでも、エチオピアにはこの蔑まれたロバの「生きる権利？」を守るための NGO があります。創設者は農村地帯で、優雅にのびのびと生きてうれしそうな本当のロバの姿を見たのがきっかけでロバ保護の活動を始めたとのこと。持ち主の意識改革や管理法の向上などに奔走しているようです。

確かに長いことロバを観察していると、何も考えていなさそうな、愚かな表情、行動に気づかされます。車が来たことを目でも耳でも敏感に察知せず、横道に動き出すまでとても時間が掛かります。忍耐のない運転手は引いていくのか、無謀に突っ込んでくる犬と並んで多くのロバ

の死体が路上に転がっています。周りに評価されず、蔑まれ、優遇されなくても、他が避けたい重労働を自身の運命と受け止め、黙って毎日過ごす。愚かさの象徴とされるそんな動物が、もしこのエチオピアに存在しなかったらどうなっていたことか。

エチオピアの特に農村での生活にロバは欠かせません。ロバのおかげでプロジェクトは幾つもの湧水貯水槽、井戸を遠い低地の村に建設できました。また、ロバがいなくなったら、農村の青空市場の風景は様変わりです。持ちこまれる品も減るでしょう。人が担いでも限界があるので、市場開催の回数も減るかもしれません。愚かと思われているこの動物にも大切な役割があり、それがしっかりとコミュニティを支えているのです。

もうすこし見栄えのいい体格、表情で、人間に愛嬌をだせるぐらいの性格・知能があったら、他の動物同様かわいがられたかもしれません。でも、変な不器用さ、愚かさが逆に世のためになっているロバ。自分にもある弱点、不器用さ、人にも言いたくない醜い心はどうだろうか。実際はそんなところには目もくれず、人に自慢できることだけ磨いて、うわべで役立つことしか手をつけない。ひょっとしたらそんなやり方が、本当に光るべき賜物が故意に捨てられてしまっているのかもしれませんが。愚かであることが見直される時代でもあるかもしれません。狭い道の真中に立ちはだかるロバ。車の警笛を鳴らさずに、ゆっくりロバがどいてくれるのを静かに待とうかと思わされる今日この頃です。

2002年11月

「もう二度と…」11月中旬、今年の旱魃による被害は、あの80年代世界を驚かせた大旱魃を更に凌ぐ最悪の事態にまで来ているとエチオピア政府が正式に世界に向けて警告を発した後、エチオピアの新聞論説は挙って「もう二度とあの過去の惨事は繰り返したくない。」と、悲鳴ともいえる論調で、国際的な支援を促す記事を盛り込みました。雨不足は国全体で起きている現象で、農作物の収穫も昨年よりも激減しており、来年の種まきにも大きな影響がでるものと予測されます。

この政府の発表に応えるように、各国大使館、大手国際NGOが大規模な緊急食糧援助を打ち出し、エチオピア中のメディアがこの緊急援助にまつわる情報で満載です。しかし、緊急事態への対応だからとしても、この短期間の内に大金や穀物がどこからとなく一気に沸いて出てくるのは、いつ見ても不思議な光景です。実際には政治力誇示を目的に、触発的に出てくるお金だけに、それが有効に使われるのか、飢餓に貧している人達が今後も援助無しに生活

できる道筋を立てながらのサポートなのか、それが検証されないまま、また今年の緊急援助も過ぎていくような気がしてなりません。

特に旱魃により、泥沼的な被害に陥っているのが遊牧民、もしくは半遊牧民達です。家畜と共に水を求めて常に歩き回る民族だけに、旱魃になれば家畜の飲み水や牧草が不足。家畜が死に絶えれば、家畜の乳などを主な食糧としている遊牧民は生きる術を失い、支援を求めて街へ流れ込み国内非難民になります。2年前旱魃の被害に会い、街の外れに設置された食糧配布センター周辺に難民キャンプを張った人々は、今でも政府の援助する食糧頼りの生活を強いられ、元の生活に戻れないままだと聞きます。

多くの援助資金、穀物がつぎ込まれているのに、旱魃がやってくれば再び援助に頼らざるを得なくなる脆弱な人々。ある遊牧民の地域で雨季の雨をためる池を援助で建設しすぎた上に、水を求めて歩く必要のなくなった人々が水場に集中するようになり、普段は頻繁に顔を突き合わせない他人と喧嘩へ発展。やがては民族同士の紛争になってしまったというケースも聞きます。地球上の資源が枯渇しつつある現代においては、遊牧のライフスタイルは限界に来ているという学者もいます。しかし、彼らが直面する飢餓に対して、何が最善のサポートとなり得るのか、しっかり彼らの現場から学ぶべきものが大いにあると思わされます。

何がベストか、はっきりした答えを持っている人はいません。しかし、緊急援助を大手 NGO や先進諸国政府が政治的アピールの競争材料として利用している限り、また被援助者のその後をじっくりと考えた上での支援で無い限り、それは縫う必要のある傷口にバンドエイドを張ってその場を凌いでいるのと同じようなことです。お金がとりあえずあるからという歪んだ姿勢から、物事の本質を見失わせているような気がしてなりません。

ある大企業の経営者はいいます。「資金繰りに悩んでばかりいては競争に勝てない。お金はなくても、これがやりたい！とビジョンをもって経営戦略を考えられる状態でなければ、創造的な事業は出来ない。お金がないからこそ、現場を直視してアイデアを練りだし、その過程でよいノウハウが培われる。」援助業界は政治力のある特定の場所にお金がだぶ付きます。資金繰りに悩まなくて良い分、そのお金がどの様に使われるのか知恵を出し合おうと努力しません。大金をただで持ち込めば地元政府や人々には依存体質が生まれる。穀物を外から持ってくれば脆弱な国内穀物市場が崩壊する。当たり前のことに注意を払わなくなる。ここから援助が更なる援助を呼ぶ原因となっているような気がします。私はどんな緊急事態であっても援助を超えて「協力」が必要な時代と考えます。その為には、「Just Do It!」ではなく、「Just See it」と「Just Listen to it」の姿勢が最初です。Do する材料がなくても、私達には見る、聞く、そして考えることの出来る存在です。過去最悪の事態と叫ばれる中、基本に立ち返り、冷静に対応できる者でありたいと思わされます。「もう二度と」同じ事態を繰り返さない為に。

2002年12月

「お父さん、なんでお祈りするの？」

大旱魃による被害で農作物を失った農民ザブドゥの息子(当時5歳)が、毎晩家族の為の食糧が与えられるように神にすがって祈る父の姿に、率直なチャレンジをします。それは、祈れども祈れども、その週はまったく食べるものにあり付けない現実があったからです。時は1980年代のエチオピア大旱魃。まわりの農民たちも見る見る痩せていきます。普通の親であれば、「いつかは与えられる」「神様を疑っちゃいけない」とその場凌ぎの返事で済ますものを、ザブドゥは黙って息子を見つめるだけ。息子に答えるだけのものが彼には無いことを、彼自身が一番知っていたからです。

その翌日、彼は村の集会に出席。そこで、FHI(国際飢餓対策機構)が簡易トイレの建築が出来る人を募っていました。たまたまその日持っていた自身の金槌と共に痩せこけた手を挙げ、ザブドゥはその日一日を使ってトイレを完成。思いがけず得られた日雇い労働で日当をもらい、そのお金でわずかな穀物を買って帰宅します。

「ほら、神様はちゃんと食べ物をくれただろう？」ようやくのことで食べ物にありつけ喜びにあふれる息子は、「うん、神様はうそつきじゃないね。」

ザブドゥは自信を取り戻し、当時の旱魃を家族と共に乗り越え、敬虔なクリスチャンになったばかりではなく、地域の重要なリーダーとして活躍した後、天に召されました。当時5歳の息子は現在、エチオピアの農村地域では珍しい高校最終学年に在籍しているとの事。

このストーリーは、当時あのトイレ建設を持ちかけたFHIのスタッフに、緊急支援も終了し落ち着いた数年後、ザブドゥ自身から聞かされたものです。そのスタッフは言います。「ザブドゥが真剣に祈り、また息子にチャレンジされていたことなど、私達の中で誰が知っていたでしょう？でも、たった一日の労働が提供されたことで、彼の人生のすべてが変わってしまったとは。これこそが人間の思惑を超えた神の業に他なりません。」

聖書の難解な教理を教えられたわけでもないザブドゥは、息子に言い訳じみたことを言って逃れたことも出来たでしょう。力づくで食べ物を他から奪い家族を説得出来たかもしれません。でも、事情を理解できない息子の前でさえも、自身の無力さを素直に認め、ただ静かに祈り求め待ち続ける時、必ず本物、そして必要なものが与えられると言うことを、この一人の農民の生き方から学ばれます。

現在、エチオピアはあの80年代よりもひどい旱魃の被害で、多くの緊急支援が開始されています。先進諸国からの大型な資金、穀物援助「競争」の真っ只中で、飢餓に苦しむ人々の心、ましてや「祈る気持ち」というところまで、誰が注意・関心を払うことができるでしょうか。こう問

われる時、自分自身にさえ祈って待つ余裕がない、とにかく目先のことを解決することに目を奪われているのに気づかされ愕然とします。統計上多くの被害者を支援することで、自分自身の存在意義を確かめては、被害者のその後を長い目でゆっくり考えられない無責任さ、軽率さ。食糧配布所で救援物資を手渡す時、人々にインタビューする時、その中にサブドゥのように真剣に祈り求める心でいる人を易々と見逃してしまっているかもしれません。人を単なる「被害者」と決め付ければ当然のことです。事態を自力で今すぐにでも変えようと必至になれば尚更です。

「待つことの秘訣は、種はすでに蒔かれており、そこに何事かが始まっていると信じることです。」最近頂いた本(ヘンリー・ナウエン著「待ち望むということ」)の中にあつた言葉です。とりあえず今の悲惨な状態を回避することに集中する時、根本原因に立ち返るべき「いま」この瞬間に自分の身を置くこと、そして「待つ」ことを止めてしまいます。忍耐強く待てないので、解決は他の所にあると期待し、目の前にいる肝心な人々への深い関係づくり、理解が後回しになります。

サブドゥの息子のように、「なぜ祈るのか？なぜ待つのか？」と、容赦なく迫り来る緊急の厳しい現実の中で、その度に本当に注意を払うべき種を見失います。それでも、今飢えに苦しむ人々の中にも、すでに何かが起きている、すばらしいものが隠されている。困難の中にもサブドゥのように静かな希望を奥に潜めている人もいます。そう信じて一歩立ち止まる時、私達に出来る最善のことが見えてくるのだと思います。「待つ」ということ。これが新たな 2003 年を迎えるにあたっての課題です。